

Title	<批評・紹介>東京城：渤海國上京龍泉址の發掘調査
Author(s)	岡田, 芳三郎
Citation	東洋史研究 (1940), 5(2): 159-161
Issue Date	1940-01-30
URL	http://dx.doi.org/10.14989/145671
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

批評・紹介

東京城——渤海國上京龍泉址の發掘調査——

東方考古學叢刊 第五冊

東亞考古學會

滿洲國牡丹江省寧安縣下の一小郡邑東京城を中心に、榆樹の下、疊々たる堆土にかこまれた方形一帯の地は、その昔海東の盛國として、聞えた彼の渤海國が堂宇輪奐の美を極めた首都上京龍泉府の地である。

本書は昭和八・九年に亘り、東亞考古學會が、本遺址について、東大教授原田淑人博士、駒井和愛氏を調査主任に、村田治郎博士や水野清一、三上次男、矢島恭助氏等の考古學班、池内博士や外山軍治氏等の歴史班など渤海研究者を殆んど總動員して行なつた發掘調査の報告書である。

渤海は言ふまでもなく高句麗人大氏一族に率ゐられた靺鞨族の國、その版圖は滿洲東部、ソ領沿海州、朝鮮咸鏡道にも及んで五京十五府六十二州を開いたと言

はれ、唐の聖曆中、國をおこした大祚榮以後十五代二百七十餘年の社稷を保つて、遂に遼の爲め亡ぼさるゝ處となつたが、時はあたかも我が奈良平安の兩朝にわたり、大陸にては唐より五代の後梁後唐の頃に當つて居る。而して、この渤海國は國初以來、或は使者を派して典籍を求め、或は學生を遣して留學せしめて、唐文化の吸収に努めたのであつて、やがては詩文に教養に、彼の唐人をして海東の盛國と言はしむるまでの文化の華をさかせたのであつたが、その渤海は同時に我が國とも關係深く、聖武朝神龜年間以來三十五回に上る彼我修交の事實や、弘法大師と親交厚かつた王孝廉の話は特に同國を親しいものに感ぜしめる。

然るに、この渤海國は殘念乍ら自らの記録を残して居らないのであつて、我國及び支那に傳へらるゝ記録によつてその盛な有様を窺ふに過ぎず、從つて同國文化の闡明は考古學的調査の結果に俟つ所大なるものがあつたのである。然し又翻つて考ふるに、由來大陸支那は治亂興亡甚しく、建設に次ぐ破壊の絶えぬ國柄であつて、文化の波又之に従つて一興一廢し、各代文化の粹は、かへつてそれらの波及した地方に保存せら

れて今日に及ぶ事、例へば漢の樂浪の如くである。唐代に關しても、我が正倉院は、その美術工藝の精をよく傳ふる所があつたが、我が奈良朝文化や新羅の文化と共に、同じ文化圈に屬すべき渤海國の都址の調査は又遺物のみならず遺跡として同文化の解明に大いに資する事あるべきことが期待せられたのであつた。

果せるかな、今回發掘調査の結果は、東西一里強、南北一里弱にわたる城址が、北邊中央に宮城を置き、その南門より外城南門に至る間は朱雀大路にも當るべき四十八間餘の大路を通じて、之によつて城内を左右兩區に分ち、又現在畑中に通ずる里路や石垣は、この兩區が更に各々四十一坊に分たれて居た事を推定せしめ、又東區に當る現在の東京城市街と大路をへだて、對稱の位置に存する西地なる場所は、大體古への東西兩市に考へらるゝ外、大路を挟んで相對する六個の寺院址が見出される等、全くそれは唐の長安城のプランを髣髴せしめるものがあり、礎石土壇の示す處、官殿は前後六棟の大廈を連ね、大極殿にも當るべき第二殿は十一面四間、百八十五尺に八十尺を數ふる堂々たる建物であつて、廊を以てこれら的大廈を結び前殿には

緩やかな階三道を通じ、或は獅子頭を以て飾つた事實も確かめられて當時の雄大な姿を如實に物語るものがある事が明かにされた。殊に第四官殿址からは綠釉の瓦製柱座が發見せられ、附近に出た鐵釘には朱が着いて居て當時朱塗の柱がその上に立つて居た事を察せしめ、又綠釉の丸瓦、鴟尾、鬼瓦等が各官殿址より出土して彼の唐代燉煌壁畫の示す如く大棟下棟及び鴟尾、鬼瓦等の裝飾部には瑠璃瓦が用ひられた事も實際に確かめられ、それ等は往時堂宇輪奐の美しさをしのばしめるのみならず、又唐代建築の制の大方をも推知せしめるものでなければならぬ。

蓋し渤海國は高句麗人主の國、そこには當然高句麗文化の動かすべからざる傳統の力の存すべき事も否めない。本調査によつて齎らされた官殿寺址出土の瓦礫蓮華文が、高句麗のそれに寧ろ近い事實は明かにその事を示し、又有名な南大朝に現存する玄武岩製の八角石燈はその太い竿と胴張りと、この度明かにし得た全體のプロポーションの持つどつしりした持ち味に、唐文化とは又異つた素朴な渤海人獨特の魂の動きを感得せしめる外、建築プラン等に於いても例へば第五宮

殿址に於いて發見し得た炕の遺制の如く渤海獨自のも
のがあつて頗る興味を惹くのであるが、この渤海味豊
かな第五宮殿址にて開元通寶ならぬ和同開珎が發見さ
れた事にも我々は彼我の修交に顧み少からず感興を覺
える事である。

以上は調査報告の傳ふる所、特に興味をひいた二三
の主だつた事項をあげたとゞまるが、我々の期待に
そむかず本調査はなほ渤海文化究明に資すべき數々の
基礎的事實を明かにして居る事であつて報告書の傳ふ
る所、なほ語るべき多くのものを存するが、今は割愛
に従ひ、以下に本書の目次をかくげてその内容を推し
ていたゞく事とする。

序説、調査の經過、遺跡（一、外城遺址 二、内城
遺址 三、官殿址 四、寺址 五、自餘の遺址）遺
物（一、瓦磚 二、石獅頭 三、建築金具 四、兵
器 五、陶容器 六、佛像 七、和同開珎 八、雜
具）結論。

本文九〇頁、圖版百二〇、卷末には三葉の地圖（内
渤海國上京龍泉府址全圖、宮城址圖は關東軍陸地測量
部片野彌一郎、黒田一兩氏の作製になる）英文解説及

び本調査以前に踏査したボノソフ氏の報告を添へて居
る。

（昭和十四年三月、東亞考古學會發行、四六四倍判、定價
參拾圓）
〔岡田芳三郎〕

E. O. Lorimer;

Language Hunting in the Karakoram.
London, 1939. pp. 310.

印度の西北地方は、カラコラム連山、ヒンヅクウ
シュ連山、葱嶺連山などの會合地點で世界でも有名な
高山地帯であるが、東洋歴史はこの地帯に、或は北
より南へ、或は西より東へ、或はその反對に、幾多の
足跡を印してゐる。今でも交通困難なるは變らないが
此の地點は英露接壤の重要邊境であるから、複雑怪奇
なる歐洲政局の遷轉はインダス上流地方に何時古代東
洋史に於けるが如き爭奪を廻起しないとも限らない。
希臘王の東征、蒙古土耳古可汗の南下は現代に於ても
必ず此地方へ先づ惹起されてくるに違ひない、時局上
にも注意してゐても興味はある。

然し僕の興味は古代史に懸つてゐる。歴山大王東征